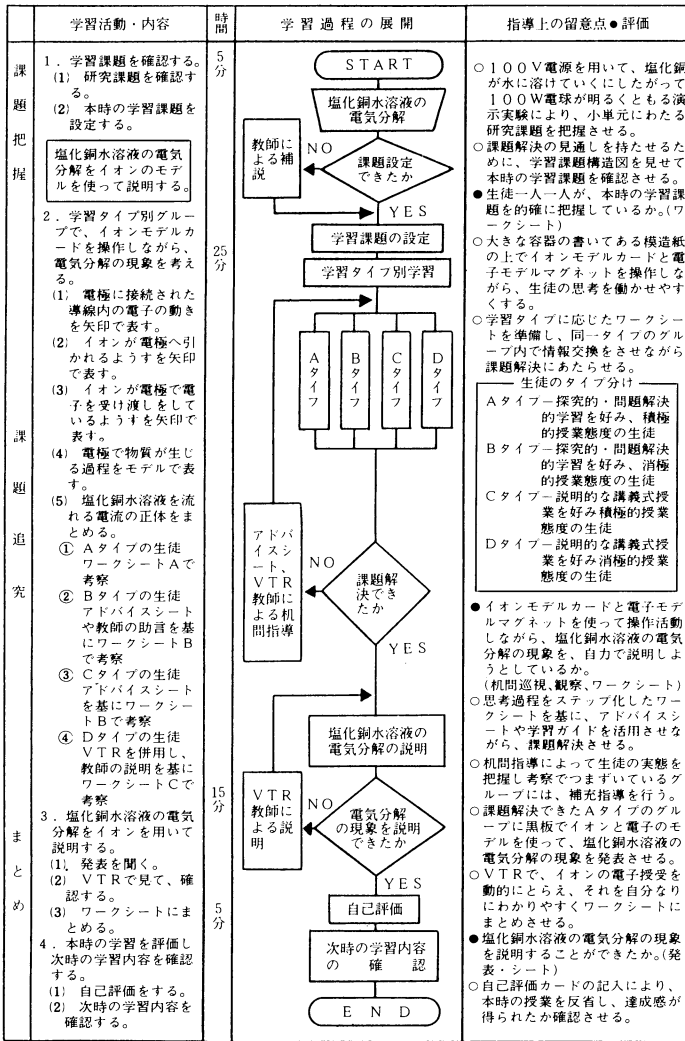


資料1 指導過程



イオンのモデルカードの操作を取り入れることにより考察することの苦手な生徒も、熱心に自分たちの思考を働かせていた。

(3) 学習スタイルの同じ生徒でグループを作り、実験させ、操作活動を進めさせたので、自分たちのペースでさかんに情報交換をしながら、積極的に課題解決を行っていた。

(4) Dタイプの生徒に対して、教師による説明の機会が多く設けられたので、科学的思考の苦手な生徒でも納

得しながら進めていた。

五、研究の結果

理科の授業についてのアンケートによる生徒の学習意欲の変容は、別表のとおりである。(資料2)

六、研究のまとめ

1 研究の成果

(1) 指導の個別化を図った自由進度別学習によって、すべての生徒に連続した探究活動の方法を習得させ、自己

探究力の基礎を身につけさせることができた。更に、生徒の興味、関心や適性を考えた課題設定学習によって、今まで培われてきた自己探究力を更に伸ばすことができた。

(2) 生徒一人一人に、課題設定、課題解決の見通し、及び課題追究までの場を保障するとともに、生徒にとって必要感のある学習材を準備したことで、一連の探究活動が進むにつれ、自力で学習課題を解決していこうとする意欲が向上してきた。

資料2 学習意欲の変容調査の結果

項	目	7月保	10月保	12月保
学習課題を見つけ出そうようになった		49	64	72
課題に対する解決の方法や見通しを持つようになった		61	68	78
自分から進んで、観察・実験をするようになった		68	77	80
観察・実験の結果を基に自分から考察するようになった		56	73	85
学習課題が解決した時、新たな疑問を持つようになった		53	60	70
自分のひらめきや考えを大切にできるようになった		50	55	61
自分の意見や考えが友達から認められるようになった		34	62	70
学習への意欲が長続きするようになった		63	68	78

(3) 課題を追究していく中で、生徒の長所が生かされ、更に、お互いの考えやひらめきが集団の中で認められ、向上しようとする態度が身についてきた。

(4) 自己評価活動を通して自分の学び方を振り返り、自己修正しながら、より高い目標に向かって学習するようになり自己評価能力が、生徒一人一人に身につけてきた。

(1) 2 今後の課題

(1) 生徒一人一人の実態をより客観的にとらえ、能力や個性を的確に伸ばす指導方法を確立していく必要がある。

(2) 情意面の目標分析と評価を生かした授業設計を行い、情意目標を生か